

近松の世話浄瑠璃に現われた往生思想

特に「心中天網島」に就て

田 辺 春 朝

 $(-)$

日本の仏教が如何なる仕方て日本の文芸に影響を与えたかということから述べる必要があると思う。日本の仏教は六世紀中頃支那より伝来して以来、日本独自の立場に於て、各時代の日本人の生活と共に發展し變化したものである。日本の文芸は仏教というある一つの固定したものがあつて、それが外から影響を及ぼしたのではなく、仏教は日本に於て動いていたのであり、そしてそれが各時代時代の特殊な姿をもつて、広く深く時代の生活の中に浸透して行つた時に、その生活の地盤から仏教によつて浸透せられた文芸が作り出されたのである。しかし仏教が偉大な芸術の創造や深遠な哲学の理解や、信仰運動が盛んに行われていた時代の文芸が必ずしも仏教的ではない。例えば奈良仏教の時代には仏像や建築、仏教哲学

等は隆盛を極めたが、万葉集などの主な文芸作品にはほとんど仏教的色彩を有しない。これが平安朝後期の南都北嶺の仏教が活動力を失いつつあるときに於て仏教に彩られた文芸が生まれたのである。その一つとして梁塵秘抄の今様の如きものが明白である。このように仏教が宗教としての新鮮な活力を失つたが為に、それに対して起つた新しい信仰運動即ち所謂鎌倉仏教の運動である。この新興仏教は前の場合と異つて既に文芸が仏教的な色彩を有している時代に興つたのである。だからそれらは直ちに文芸の内に現われて来るように思われるが、事實はそうではなく、念仏宗の運動が初め空也によつて起されたのは平安朝文芸の最盛期よりも半世紀以上先立っている。源空の専修念仏の唱道は平氏の最盛期に始まり、関

東武士や新興階級にその影響を及ぼした後に平家物語、徒然草の如き新興仏教に浸透せられた文芸作品が現われたのである。日本仏教が思想的、宗教的生命を失つた徳川時代に於ても仏教的色彩を有した文芸作品が出ているのである。塚本善隆氏の「二十世紀の仏教」平祐史氏の「浄土宗の近世化」（何れも仏教大学研究紀要三五号による）の中にも見出せるように、徳川時代に於てはキリスト教を禁止し幕府は毎戸に仏壇を置き所属寺院を定め、天下を挙げて信と不信とに論なく仏教を宗旨として葬祭をこれに托した。ここに寺院は安定せられて、其結果游惰に流れ、正善なる宗教家としての活動力を弱め、その上儒教が奨励せられ中世以来の伝統的權威を否定され、儒教に影響を受けた知識階級により排仏的傾向が激成されたのである。

しかし仏教は大衆の生活の内部に於てその伝統的な勢力を維持し続けたのである。これが芭蕉の俳諧や西鶴に見られる詩禅一致の境であり、又山間の僻村にまで勢力を張つていた浄瑠璃の文芸がその基調に於て著しく仏教的なのは当然であり、近松の世話浄瑠璃が民間信仰を反

映しているのもその一例である。近松の浄瑠璃や其他文芸作品に於ては全般的には仏教的色彩を有しているが、これは作者の体験の表現であつて思想の表現ではない。そしてこの体験に仿きかけているのは特に創作家の場合は必ずしも思想ではなく、作者の体験によつて得られた仏教的心情が、その作品を仏教的に色づけているのである。しかしその作品が全然仏教的思想と關係を持たないのではない。近松の作品に於てもその時代に応じた仏教的色彩を有するのである。そこで彼の作品に入る前に伝記について述べなければならないのであるが紙数の都合で省略するが、彼の伝記は現代に於ても確定しておらず出生地や死んだ所についても不明である。ただ彼が死ぬ二週間程前に書いた「辞世の文」が残っており、これによると彼は杉森家という武家出身であることがわかる。近松はこの時に於て和漢や古典にいたる教養を身につけたと思われる。文学は人間の感情、思想を文章により表現し、人の感情に訴える事を主としているが、その中戯曲は多少共教訓性、又は知識を授ける啓蒙性を帯びている。

(二)

近松の時代の庶民は自分の生きる目標、基準もしくは新知識を要求していたのである。近松の世話浄瑠璃の心中物に於ては現世はどこまでも人間の行為と葛藤により、心中であれば心中をした瞬間、彼等主人公は未来成仏を約束せられている。そして彼等は人間的葛藤を全身的に生きて死んでいつたから現世には未練はなく死はそのまま成仏を意味したのである。近松の元禄期における社会の経済は町衆から上層町人へと移り商業資本下に於ける矛盾が町人生活の意識の面に現われ悲劇的作品が観客に受けたのである。心中物は輪廻の信仰から来る「夫婦は二世」「一蓮托生」を中心として人間の事が死によつて中断せられないという確信の上に立ち、そしてここでは暗い半面を捨て主として靈魂不滅の考えのもとに受取られ、これが一般民衆の心情に浸み込む事によつて恋愛の高潮を中心に表現せられたのである。

(三)

近松の世話浄瑠璃に現われている仏教は主に法華、浄土、真言の往生救済によつて作中の悲運の人物を救済し

ようとしている。しかし全体としては浄土の念仏三昧を中心として仏や浄土に対する強烈な思慕を見出すことが出来る。

「心中天網島」は大阪の寺町の浄土宗の寺々で陰暦の十月六日から十五日までの十日間毎夜談義や念仏が催された「十夜」の行事を背景にしたものである。上の巻の曾根新地の河庄という茶屋の場面で、紀の国屋小春が「同じ死ぬる道にも、十夜の内に死んだものは、仏に成るといいますか定かいな」と、これは紙屋治兵衛の兄孫右衛門に訊ねているのである。中の巻の天満の紙屋治兵衛の店先で、治兵衛が恋相手の女小春の変心を恐り、仕事も手につかずに炬達にうたた寝をしているところにも「そとは十夜の人通り見世と内とをひとしめに」という叙述がある。これは治兵衛の店の前を通つて北の寺町に急ぐ善男善女の足音である。そこへ訪ねて来る孫右衛門は「ゆうべ十夜の念仏に講中の物語」を聞いてかけつけて来たと言ふ。下の巻の小春・治兵衛の網島大長寺境内にて心中する直前に「風さそいくる念仏はわれにすすむるなむあみだ仏……寺の念仏も切回向」とこれも寺から

流れて来る十夜念仏の声である。この中に大阪町人の生活をはうかがうことが出来る。ここで「十夜の内に死んだ者は仏に成る云々」という文句が出て来るが、浄土宗のみならず仏教自体心中や自殺は奨励していない。では何故このような考え方が起つたかということになるが、これを述べる為には当時の経済・社会生活等を述べなければならぬ。「心中天網島」が成立した時は享保の改革以後であり、時代的には京阪町人の没落期にあたっている。一般町人の没落期に於て小町人の社会も固定し、その上小町人即ち庶民大衆には封建的な拘束や商業資本所謂、資本主義から来る矛盾があつたのである。紙屋治兵衛も六十日毎に問屋にせめられる小町人であり、金の力で自分の人間的な運命を切り開いてゆけず、逆に自分の運命を金のために破滅させられていたのである。そして更に「太兵衛めがいんげんこき、治兵衛身代いきついで、金に手詰つてなんどと、大阪中を触廻り、問屋中のつき合にも、面をまぶれ生恥かく」と治兵衛が云うように封建社会に於ては「商売仲間の恥」が重んぜられていたのである。このように金力のみが小春や治兵衛の対立

物として存在したのではなく、封建的な拘束も彼等の対立物であつた。小春は廊という封建的なリングの中に住んでいる女であり、治兵衛は封建的家族制度を維持すべき立場の人間である。そして彼は従兄弟どうしの結婚であり、姑は叔母、舅は叔母輩という血縁關係に縛られている。彼の女房おさんは治兵衛・小春の恋愛と家族制度の対立の中に置かれ、小春が商売敵の太兵衛に請出されれば夫の面目が立たず、商売上にも關係する。このように金銭の問題、封建社会、家族制度、生活問題、経済力などと小春・治兵衛の恋愛等の矛盾がおさんの上にあるのである。そこで治兵衛が、小春を請出したら「そなたはなんととなる」との問を出すと、これに對し、おさんは「アツアそうじや、ハテ何とせう。子供の乳母か飯焚か隠居なりともしませう」という。これはそうした矛盾から吐き出されているのである。更におさんは小春を「アア悲しやこの人を殺しては女同志の義理が立たぬ」と、このように「女同志の義理」「問屋仲間の恥」と男の意地、それに二年余り夫婦關係をおさんと結ばず小春を肉愛している治兵衛と小春との恋愛が破綻の原因となつて

いるのである。そこで小春と治兵衛は義理にせまられて、心中直前に「この髪ある中は紙屋治兵衛というおさんが夫、髪切つたれば出家の身三界の家を出て、妻子珍宝不随者の法師、おさんといふ女房なければ、おぬしが立つる義理もなし……うき世をのがれし尼法師、夫婦の義理とは俗の昔、とてもことにさつぱりと」と云つて二人共髪を切つて義理や、この三界の浮世から逃れようとしているのであるが「最後は同じ時ながら、捨身の品も所もかへおさんに立て抜く心の道」というように最後まで義理立てているのである。更に彼等を心中させたのは

「夫の恥と我が義理」のみでなく、享保の頃に町人階級を襲つた恐怖も加味されるのである。ここに治兵衛が遊女のために消費に赴かざるを得なかつた治兵衛の人間性の悲劇が存在するのである。このように近松の心中は封建社会の圧迫が原因である。近松は心中せざるをえない悲しい愛の人々を宗教的罪人として裁かず、浄土教の世界から同情し、その死相を浄土教的に美化しているのである。そして「風さそひくる念仏はわれにすすむるなむあみだ仏、彌陀の利剣にぐつと刺され」（心中天網島）

「南無阿彌陀、南無阿彌陀、南無阿彌陀仏とくり通し、繰通す腕先も、弱るを見れば両手をのべ、断末魔の四苦八苦、哀といふも余りあり」（曾根崎心中）このように近松の心中物のほとんどが下巻の終局か終局に近い部分に念仏の声が出て来るのであり、安易な念仏によつて悲運の人物を救済しようとしているのである。即ち近松の心中物の往生の因は念仏である。極微の最後の一念が生死の苦悩を離れ永遠の生命に生きる因である。しかし心中人物は現実の相対界では現世から見捨てられた敗北者である。近松は法然の念仏多善根の教えと観經の「光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨」によつて浄土教的輪廻信仰によつてこの二人を互に永遠の女性永遠の男性として往生させている。そして選択集の念仏、多善と諸仏、証誠のところに出現するように、一心不乱に念仏を申せば臨終にあつて阿彌陀極樂国土に往生出来るとして、又「仏滅後、一切造罪凡夫但廻心念阿彌仏、願生浄土、上尽百年、下至七日一日、十声一声等、命欲終時、仏与聖衆自来迎接、即得往生云々」と、この考えから享保の没落期における小町人は、この恐怖の三界から逃れようと

としていたのであつて、そこで「風さそひ来る念仏はわれにすすむるなむあみだ仏」というように多善根である十夜の念仏を聞きつつ、その念仏を死する者も称え一切の罪を捨てて往生しようとしているのである。そして

「首になわを引つかくる寺の念仏も切回向、有縁無縁乃至法界、平等の声を限りに樋の上より、一蓮托生なむあみだ仏と踏みはずし」と念仏の利益によつて小春と治兵衛を一蓮托生させて、近松は「すぐに成仏得脱の誓ひの網島心中と目ごとに、涙をかけにける」というように社会から名利を捨てさせられた、金利に貪欲な元禄商人の死に対して同情の筆をもつて最後を結んでいる。

(四)

近松はこのように小春・治兵衛の受難の深刻性を描いているが、他面から見れば、治兵衛の女房おさんの受難が、むしろ「天網島」の悲劇の本質である。

さて心中物全体を見ると「未来は女夫」と、未来の光明を認知出来るが、これは徳川時代の仏教思想からの来世云々という思想ではなく、当時の浄瑠璃の観客がこれを望んだのであり筋の発展からこのような認知が成され

ているのである。ところで現代の社会での心中は主に生活難や家庭不和、病氣、精神異状、恋愛其他種々の原因であるが、元禄期に於ては現代の如く親子心中や一家心中の少ない所にまだまだ生の脅迫が激しくなかつたことが知られる。最近中・高生間に「生に対する疑問」ということが云われているようであるがこのような心理と宗教との関係についても大いに研究の余地があると思う。

参考文献 ◎江戸文学史(上・中・下)——高野辰之

- ◎近松——大久保忠国 ◎近松門左衛門集(上・中・下)——高野正巳 ◎近松門左衛門——東京大学出版会近松研究会
◎近松傑作選新解——大藪虎亮 ◎続日本精神史研究——和辻哲郎 ◎中世文芸と仏教——村田昇 ◎仏教大学研究紀要第三十五号 ◎重選沢本願念仏集 ◎新日本文学史——山岸徳平